

謹呈

平成28年6月吉日
一般財団法人熊本公德会

謹啓

『公德』の最新30号をお届けいたします。

今号には ●教育講演会 箏曲家 藤川いずみ氏

「音楽で心に潤いを」

- 第12回「公德文芸賞」入賞者
- 熊本の心県民大会・作文コンクールの表彰
- 作家 出久根達郎氏の講演

「作家になるまで 私の中の『熊本の心』」

を掲載しました。

27年度後期の「こころの時代を考えるセミナー」の要旨、高校生文芸の結果も掲載しています。

『公德』は熊本県内の小中学校、高校、公立図書館等に無償で配布しています。一般にも広く、購読をご希望の方に差し上げております。多くの方々に読んでいただければ幸いです。

謹白

熊本公德会

- 心身の鍛錬、公德心の涵養を通して、日本人の心のふるさとを守り、育てる活動をしています。
- ・80年の歴史を誇る武道場「振武館」の一般開放
 - ・社会教育講演会・セミナーの開催
 - ・広報・出版に関する事業
 - ・豊かな郷土づくりへの支援

設立 昭和18年9月
所在地 〒860-0845 熊本市中心区上通町2番31号
(びふれす熊日会館6階)
電話 096-327-2600 ファクス 096-327-5221

公德

Vol. 30
2016

社会教育講演会

「音楽で心に潤いを」 藤川いずみ氏(箏曲家)

こころの時代を考えるセミナー(平成27年度後期抄録)

第12回「公德文芸賞」入賞作決まる

熊本市で熊本の心県民大会 作文コンクールの表彰

(くまもと文学・歴史館開館記念講演会)

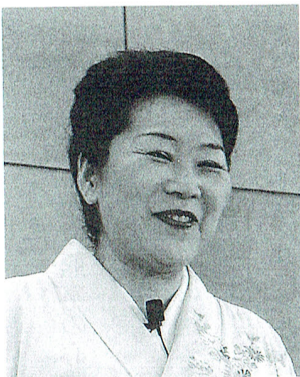
「作家になるまで 私の中の『熊本の心』」

出久根達郎氏(作家)

「音楽で心に潤いを」

自分にしかない宝物を大切に

箏曲家 藤川いずみさん



講演をする藤川いずみさん

一般財団法人熊本公徳会の平成28年度教育講演会が5月26日に玉名市の玉南中、翌27日に宇城市の豊野小中学校で開かれ、箏曲家の藤川いずみさんが「音楽で心に潤いを」と題して講演しました。藤川さんは第2部では、箏の構造や奏法などを紹介しながら名曲「春の海」などを演奏、生徒たちは日本の伝統楽器の優雅な調べに耳を傾けていました。

第一部 講演「音楽で心に潤いを」

音楽は心と心が通じる面白いもの

今日は、日本の伝統楽器を代表する箏を通して、音楽で心に潤いををテーマに、最初はお話、次に箏の紹介と演奏、そして最後に皆さんに箏の体験をしてもらいたいと思います。

お話の前に、箏といろんな外国の楽器がコラボレーションしている映像(DVD)を観てもらいました。どうでしたか。箏のイメージが変わった人がいると思います。箏というのはとても音楽の世界が広く、いろんな表現幅を持っていることを知っていただけだと思います。音の表現幅が広いので、いろんな外国の楽器と演奏することができます。

DVDにあったように、スペイン舞踊のフラメンコとお箏のコラボ、ユニット「トリニティ」の演奏はとてもエネルギッシュにできました。実は、フラメンコの歌い手カンテとギターの奏者とは、このとき初めて会った人たちです。前日に初めて顔を合わせて、リハーサル

てすぐ本番でした。音楽って、そういうことができるんですね。

次に見てもらったのは、日韓伝統オーケストラの日本と韓国の伝統楽器の演奏です。韓国の伝統楽器にはいろんな種類があります。日本の伝統楽器もいろんな種類があります。お互いに共通しているもの、あるいはないものがあり、それぞれの楽器を持ち寄って、いろんな音を出して、一つの指揮棒に向かって演奏しました。

最後に見てもらったのは、メルボルンリサイタルのときのオーストラリア伝統楽器との演奏です。オーストラリアはご存じのように、南半球にありますね。日本はいろんな国と仲良くしなくてはなりません。特に南半球はとても大事です。私は日豪協会の理事をしていますけれども、戦争中にシドニー湾攻撃で山鹿市出身の松尾敬宇中佐が亡くなり、オーストラリアの海軍が、亡くなった松尾中佐を戦争中にもかかわらず、海軍葬で最高の礼を尽くしてくれたことがきっかけで、戦後に日本とオーストラリアの友好が深まりました。

そして、私はオーストラリア人の親友である、尺八奏

者のアンさんと、オーストラリアで演奏したり、日本で演奏したりしています。音楽というものは、例えば政治的なことでは解決できないことでも、音楽はそれを乗り越えて、心と心でつながることが出来ます。言葉とは違うツール、違う次元で語り合うことができます。

オーストラリアのアンさんとは今から12年前に初めてメルボルンで会いました。お友達のところまでライブをしていたとき、その友達が、「いまここにお箏の奏者が来ているから、アン、尺八を持っておいでよ」と言っていて、アンが尺八を持って来ました。そのライブにアンさんが飛び入りで演奏することになり、私たちは「ハロー」も「こんにちは」も言う前に、「春の海」を急に弾くことになったのです。

そして、初めて音を出したにもかかわらず、アンがどんな風に弾きたいのか、それに私がどう応えるのか、音のやり取りをして、私はアンのが理解でき、アンも私のことを理解でき、そういう不思議な体験をしたことがあります。音楽はそういうことができる、本当に面白いものだなと思います。

出されていくものです。

コラボレーションというのはまず自分がしっかりしていないとできません。いい加減なことをやっている人も、一緒に音を合わせて出すことはできません。でも出したところで、いい加減な程度のレベルでしか合わせることはできない。だから少しでも面白いと思うようにするには、自分が少しでも高いところを目指して、コツコツと鍛錬したり追求したりしていると、そのレベルの人と一緒にお互いがお互いを引き出すことができます。

つまり、他人と何か協調してやる、そして新しいものを生み出していく、そういうことの基本は自分がしっかりしたものを持っていること、それが大事です。それを皆さん、今日をきっかけによく考えてみてください。これは大人の私たちも、ずっと追い求めています。おそらく死ぬまで、「自分のいいものは何だろう」とそれを追い求めていくのが人生の旅だと思えます。

自分は一体何者なのか。自分の生活の中になると、それがあまりにも当たり前でなかなか分からないものです。例えば今、外から小鳥のきれいな鳴き声が聞こえています。

コラボは自分がしっかりしていないとできない

グローバルになればなるほど伝統の価値観が問われます。これはどういうことかと言うと、世界のいろんな人たちがつながる、そしてつながっていけばいくほど、何が自分と他人とは違うのか、その違いこそが素晴らしいものだったり、自分にしかないものだったり、そしてそれが評価される。つまり世界の中で、自分しか持っていないもの、オリジナリティー、独自のもの、それが宝物で、とても大事なもののですね。

それでは、皆さんに尋ねてみたいと思います。あなたにしかないもの、それは何ですか？

自分の心の中で考えてみましょう。自分は他人と違って、これを持っている。そういうものが一個でも見つかったら、それはあなたの宝物です。そしてそういうものを大事にしていかなければいけません。それは自分の中で気づいていないかもしれない。それを引き出してくれる人とこの先出会うことが大切です。それはお友達だったり、先生だったり、いろんな人との出会いの中で引き

すが、これはみんなが住んでいるところでは毎日よく聞こえる、当たり前のことかもしれない。けれども、外から来ている私にとっては鳥の音がきれいだなと感じる。それは私の住むところにはなくて、この土地にはある、素晴らしいものなのですね。つまり、外から見ると、自分たちのことがよく見える。広い視野を持って、自分を見つめることが必要ですね。私は箏をしていますけれども、日本の文化がいかに素晴らしいか、それを外国の人が教えてくれます。

世界がうらやむ日本楽器の歴史と伝統

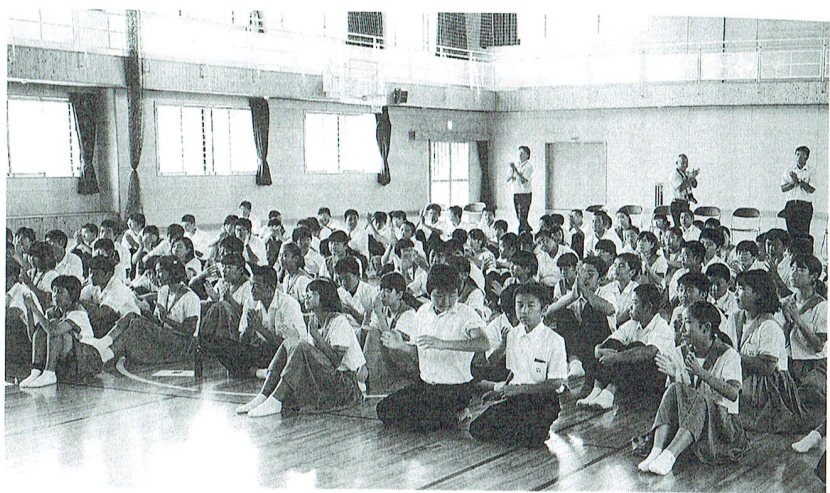
なぜ、歴史と伝統が大切なのでしょう。皆さんは日本という国に住んでいて、歴史の長い国だということは知っていますか。日本のように長く歴史が続いて来た国は世界の中でも珍しいです。なぜ、私がそれを強く感じるかと言いますと、実は楽器の面から見ると、本当に長い歴史の間、例えば13弦の箏は1500年もの長い間、同じ形で使われてきています。

それは楽器を弾く人も、それを作る職人も、ずっとそ

のまま存在し、代が替わってもそれを伝えてきたということです。口から口へと伝えてきました。例えば、家庭の味を、その家の風合いやニュアンスまでを口から口へ伝えるように、箏の演奏を口から口へ歌って伝えてきました。それをずっと守ってきました。お箏の楽譜ができたのは最近です。戦後になってからです。それまでは音だけで、口伝で伝わってきました。

戦争があり、他国から攻められて滅ぼされて、奏者もいなくなった、楽器を作る人もなくなった、それを知っている人もいなくなったというような国や地域ではこういう伝統楽器は伝わりません。中国も長い歴史を持っていますけれども、実は現在の中国の楽器は近代化された材質で作られています。それは国がどんどん変わってきたということでしょう。

私は中国と韓国、そして日本の伝統楽器の80人ぐらいのオーケストラをつくってオーケストラアジアの公演をやりました。演奏の合間に、指揮者が楽器の説明をします。そのとき、指揮者は日本の箏や琵琶を見せて、実は中国の楽器も昔はこうでしたと説明するのです。



箏の演奏に拍手する玉南中学校の生徒たち

奈良東大寺の正倉院宝庫には大切な楽器が納められています。中国や韓国の学者が正倉院に行き研究するといふくらいに、日本には古い楽器が残っています。私は、お箏を通じて大事に日本楽器の歴史と伝統を昔の人から私の体の中に取り込み、それを次に未来の人につないでいく、そういう橋渡しの役をしなければなりません。皆さんとたまたまこういう機会を持つことができました。私はお箏を通して、日本が大事にしてきた、そういうものを皆さんに伝えていくのが、私の使命だと思います。

日本人が大切に守ってきた洗練された型

オーストラリアの話に戻りますけれども、オーストラリアにはジャパンフェステバルというものがあります。茶道、それから武道、例えば、なぎなた、真剣、剣道など、さらに生け花、日本舞踊、お香など日本の伝統文化、それに縁日に並ぶ玩具のヨーヨーとか竹馬とか、ありとあらゆる日本の文化が紹介されます。しかも、それを普段楽しんでやっている人たちが、そこで発表するといふ

ものです。

どうしてオーストラリアの人たちがそんなに日本の文化に興味があるのかな、と最初に行ったときは興味津々でした。フェステバル会場の前に八橋（木製の橋）が組まれ、焼き鳥などの出店があるところに、若い男の子と女の子のカップルがいました。日本の着物を着ていくと入場料がただです。着物をどこで調達したのかは知りませんが、男の子は紋付き袴、女の子は浴衣を着ていました。女の子は巾着みたいなものに文庫本を入れ、男の子は箱いっぱい漫画本を持っていました。「それはどうしたの？」と聞いたら、「ここで買いました。日本の漫画本を読むのが楽しみ。私たちは日本の文化が大好きです」と言ってくれました。

オーストラリアの歴史をたどると、祖先はイギリスからやってきて、すでに現地にはアボリジニの方々がいいた。国ができて百年ちよつとの新しい国です。そうした中で、心が求めているもの、心のより所を探す人たちが、魂が浮遊している人たちがたくさんいるのですね。

そうしたときに、日本の伝統的なものがとてもうらや

ましく見えるのです。例えばお茶セレモニーの部屋はチケツトがいつも売り切れで、たくさんの方がお茶を待っています。なぜそのような作法でお茶を入れるのか、お湯を注いでただ飲めばいいじゃないか、と思うけれども、それをあのような作法で丁寧に入れて、美しい所作で美しい型でお茶を入れて差し上げる、それをいただく。そのような長年培われた美の極致の型、そういうものがある日本をすごくうらやましく思っています。なぜそのような型ができたか、それはいろんな所作を試みて、今の型が一番美しかったから残ったのですね。

これをお箏に言い換えてみると、お箏には右手17、左手8の古典の手があります。それは箏を弾くときに、古典の手として一番美しい型です。演奏に必要な手が追求されてきて、そういう手法が生まれました。日本の型というものは何も堅苦しいものではありません。洗練された極致、そういうものを日本人が大切に守っている。そのような目で、これから周りを見ていくといろんな発見があります。

いという話ではなくて、柔軟な教育、いろんな教育がなされているということです。何でもすぐに変化できる、柔軟な教育は素晴らしいと思います。そしてもう一つ、大事にずっと守られてきた、変わらないものも素晴らしいのです。

変わるものはその先に創造、そして変わらないものは伝統、私たちにはその両方が必要です。自分の中に柔らかな部分としっかり持っている部分の両方を自分の中にバランスよく持つ、それは大事なことです。

先ほど観てもらったDVDの話に戻りますが、自分がしっかりした、例えばお箏の基礎、古典の基礎、音色、そういうものを身につけていてこそ、初めて他の人と交流ができ、協力ができる。そこがすごく重要なことですね。その中で、自分がいかに高いところまで頑張って努力していけるか、その高さによって高いレベルの人と出会えるのです。

今は携帯電話で、皆さん簡単にやりとりしていますね。先日、地震があったとき、思いがけない人、遠くの人から、「けがはありませんでしたか?」と連絡が来ました。

自分を日々鍛錬しレベルの高いつながりを

オーストラリアの教育は素晴らしいです。新しい国なので何にでも柔軟な対応をして、とにかく決断が早く、何でもすぐできるのです。私たちが日本に帰ろうとしているとき、私たちの公演を観た人が、「自分の子どもが行っている学校にぜひ来てください」ということで、帰国するその日に学校に呼ばれて行きました。

そのときの話をすると、その学校はイマージョン教育をしている小学校でした。すべて日本語による授業が行われている学校です。校内放送も日本語でした。私たちの演奏後の質問も日本語でした。「何か質問がありますか」と聞くと「ハイ、ハイ」と手が挙がりました。実は公演の中で、「ドンパン節」という面白い遊びをしました。その遊びが楽しかったらしく、「だんだん速くなってきたら、ついていけなくなり、それが面白かった」と1年生の子が言ってくれました。

1年生から6年生までみんな日本語がしゃべれます。しゃべれないのは先生です。外国語がしゃべれるから簡単に連絡が取れて、人とつながっていて、ありがたいことですね。それは大事なことですけれども、自分が高いところを目指して、日々努力していくと、それを認めてくれる周りの人がいて、それをやっている人同士が共鳴して、いい関係、いつながり、レベルの高いつながり、そして素晴らしいものが生まれるのですね。

そのために皆さんの先生方は学校で基礎を教えてください。「なんで数学とかしなくてはならないの」とか思うかもしれません。私も中学生のときにそう思ったこともありましたが、それは人間ができていく人格形成の中で、論理的思考が必要ですし、皆さんの基礎として重要なものです。ですから中学校で勉強している日々というのは、とても貴重な時間で、決して戻ることはできない大切なものなのです。

先ほど、変わらないものが大事、伝統的なものが大事と言いましたが、なぜ歴史、伝統的なものが大事なのか。「温故知新」、こういう言葉は知っていますか?

聞いたことがあると思います。「古きをたずねて、新しきを知る」、歴史を知ると、未来が見えてくる。箏は

古典が基本です。1、2のシャンと弾いたときに、そのシャンという音が濁っているのはダメです。シャンという音が濁れば、その人の魂は濁っている。その人は動揺して弾いている。そういうふうに見ます。

そういうものがあつて、それから新しいものを作っていく。自分がちょうど中間にいて、古いものから新しいものに移行していく。その中で自分もがき苦しむ。いたい、自分に何ができるのだろう。何回やってもうまくいかないことがある。だけど、その中に一つ、二つ、これはいけそうだな、というふうなこと、そういうものを、皆さんも一つ、一つ、見つけていくといいな、と思います。

好きな音楽を見つけましょう

皆さん、自分探しの旅に出てみましょう。自分が立っているところはどこか。自分は何者か。自分の魅力は何か。一つでもいいから好きなところを探してみましよう。それをしっかり持っていることが大切です。

自分の悪いところを考えてみてください。それはすぐ脳からホルモンが出ます。そうするとガチガチの体が出来になります。好きな曲は脳波に影響します。

私が皆さんの年頃に好きだったのは、ウイーン少年合唱団、♪天使の歌声です。一生懸命にラブレターを書きました。そうしたら返事が来ました。ウイーンに憧れてウイーンに行きたいなと思いました。そうしたら高校3年のときにお箏でウイーンに行く機会がありました。それはウイーンの国連都市ビルの落成記念で、150カ国の民俗芸能が集まり、その中のお箏のチームの一員として行きました。ウイーンに行ってみて、いろんな国の民俗芸能を観たときに、「私は日本人だから、日本のものをやっているよかったんだな」と思って、お箏の世界に入りました。

好きな曲もそうですけれども、理解できなかった曲、嫌いな曲でも、後になって分かることもあります。それは好き嫌いでも、ものを判断するのではなくて、もう一つの次元、構造を理解したり、意味を理解したり、自分の生きてきた中で、物の見方の幅が広がったり、深みが出てきたり、そういうふうには人格形成がされてくると、

に見つかるよね。でも、いいところを探すのは難しいですね。お友達の良いところはよく分かるかな。いいところも分かるよね。一番難しいのは自分のいいところが分かること。もし、自分のいいところを探すのが難しいのなら、自分の好きなものを探してみましよう。

音楽を聴くと、自分の心が共鳴します。メロディーだったり、好きな歌詞だったり、心が動いて何度も繰り返し、繰り返し聴きますね。その音楽を自分の心の中に刻む。それがあるときは自分を励ましてくれたり、あるときは慰めてくれたり、あるときは一歩前に進む勇気をくれたりします。

皆さん、スポーツをやっているでしょう。スポーツは音楽にすごく関係がありますね。ボクシングの試合でボクサーが登場するときのテーマ音楽、落語家が登場するときの三味線のお囃子、フィギュアスケートのときのプログラム曲、これらの音楽はみんなスポーツ選手や囃子の好きな曲です。なぜ、好きな曲が必要か。それは好きな曲は、脳の働き、体の働きをよくしてくれます。ものすごく緊張していたりするとき、好きな音楽を聴くと、

今まで分からなかった音楽がより近くに感じるがあります。それは自分がより上に成長したという証しです。

私の場合、若いころ好きだったウイーン少年合唱団やマイケル・ジャクソン、プリンスの音楽を今聴くと、当時の思い出がパァーとよみがえってきます。そのとき悲しんでいた自分がいたり、失恋してショックだった自分がいたり、だけど今は乗り越えた自分がある。その時々自分を音楽がよみがえらせてくれます。

そして、「失ったものは何もないよ」と音楽が語り掛けてくれます。

第2部 箏の紹介と演奏

日本音楽の特徴は「鎮魂」と「祈り」

お箏の古典の曲を聴くと、皆さんは「眠くなるなあ」と思うでしょう。古典の曲は眠くなります。それは正しい聴き方かもしれません。日本の音楽の特徴を二つ言います。一つは「鎮魂」、一つは「祈り」です。

「鎮魂」とは魂を鎮めること。乱れている心を、だんだ

ん自分の軸に戻していきます。いろんなところに飛び出していたギザギザが、だんだん自分の芯に戻ってきます。そして荒れ狂う波が静まるように、だんだん心が穏やかに鎮まってくる。それが日本の古典音楽の特徴です。

皆さん、お経を聞くと眠くなるでしょう。それは何を唱えているか分からないからです。しかし、聞いているとだんだん心が落ち着いてくる。そういう感じと似ています。古典を勉強し、分からなかったことが理解できるようにになります。そうすると、古典が面白くなります。

もう一つの「祈り」。もっと古い時代に厳しい自然の中で生きる人々は、神と交信をしていました。ここに西都原古墳から買ってきた埴輪を持って来ました。これは板に6本の弦を付けたものを弾いています。何をしているかという、神と交信している。例えば、雨が降らなくて、日照りで作物が育たないときに、「雨を降らせてください」と祈りを神に届けたために、人の声より大きな音を出す太鼓や、美しい音を奏でる弦を張った鳴り物で、神様を起こすために音を出していたということです。まず、そこが分かっていないと日本の音楽を聴くことが

次に、「六段の調べ」を皆さんと勉強しましょうか。古典の奏法です。私の弾いている音色が濁っていたら、それはダメです。うれしいことがあったり、悲しいことがあったり、心は変化しますが、「六段の調べ」を練習するときに、最初のシャンを鳴らしたときに、今日の自分の心が澄んでいるかを問われます。

それから古典の箏の手法は、江戸時代初期に活躍した八橋検校やしばしけんぎょうが基礎をつくりました。西洋音楽でいえばバッハの時代より前です。箏の手法にはいろいろありますけれども、右手は主に爪で鳴らし、左手は音程を変えたり、奏力を変えたりして音にニュアンス、趣を出します。

それでは八橋検校が作曲した「六段の調べ」を演奏します。この曲は1段から6段までの6部で構成されています。そして「序破急」といって、日本の音楽の流れの特徴ですけれども、始めはゆっくり、そしてそのゆっくりが破られて速くなり、最後はもっと速くなります。

【「六段の調べ」（八橋検校作曲）を演奏】

できないと思います。

箏の構造と演奏

次に箏の構造です。今日のこのためにティッシュケースで箏を作ってきました。簡単に作れます。ティッシュケースと同じように、箏の内側に空洞があります。ティッシュケースの底に糸を付けて、洗濯バサミを箏柱ことうにしました。ちよつと音を出してみよう。ちゃんと鳴りませんね。箏はこれと同じような構造ですね。

それでは演奏に入ります。箏の爪は右手の親指と人差し指と中指につけます。指紋のある指の腹側に爪を付けます。よく間違えて逆に付ける人がいますけど、それは弾けません。それでは、後で演奏の体験してもらいますけれども、そのときに弾いてもらう「桜変奏曲」の一部を弾いてみます。演奏は角田ちひろさんです。

【箏奏者の角田ちひろさんが舞台上上がり、藤川いずみさんと一緒に「さくら変奏曲」を演奏】

熊本に伝わる古典の演奏

次に、尺八の釦くき虚霧洞きよきりどうさんを紹介します。釦さんは11歳からお父さんに尺八を習われて、3代目虚霧洞の名



尺八の釦虚霧洞氏の「尾上の松」演奏（玉南中学校）

を襲名なさいました。平成26年、くまもと県民文化賞を受賞されました。

今日は、熊本に伝わる古典の「尾上の松」を演奏してもらいます。皆さん、ここまで来たら、古典を聴く耳ができたと思います。この曲はおめでたい曲で、熊本で古くから伝わってきたものです。東京芸術大学邦楽科で演奏される最高の曲とされています。

「このような曲は、お箏と尺八と三味線、三絃さんげんと言いますけれども、三曲で弾く昔ながらの古典の手法です。三曲ものは江戸時代の後半に楽しむようになりました。幕末に熊本だけに『尾上の松』という曲が演奏されました。次に、宮城道雄さんという明治から大正にかけて活躍されたお箏の大先輩が作曲された『春の海』を尺八とお箏で演奏します。この曲は、瀬戸内海の穏やかな春の海の情感を、目の不自由な宮城道夫さんが感じて作られました」(釧霧洞さんの解説)

【「尾上の松」(作曲者不詳)と「春の海」(宮城道雄作曲)の演奏】

現代の箏のテクニク

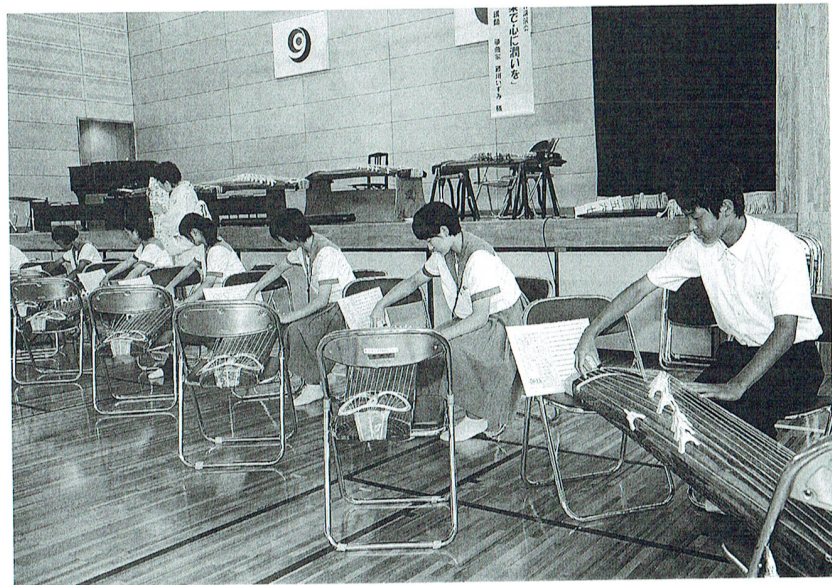
それでは、今日はいろんな箏を持ってきましたので、皆さんにご紹介します。13弦の箏に比べ17弦は大きくて弦も低い音が出ます。合奏のときは低音、ベースを担当します。こちらは21弦です。17弦は95年前、21弦は45年前にできた、箏の歴史からすると新しい箏で、新しい手法が生まれました。

今から21弦箏で弾く曲は、新箏「雨ざんざん」です。最初、雷の音がバリバリとして夕立が来て、みんなが木陰に逃げ込むというような、雨が降る様子を表現しています。

【雨ざんざん】(三木稔作曲)の演奏】

生田流と山田流の箏、アジアの箏

これは生田流の古いお箏です。箏の弦は、現在はテトロン製が多いのですが、昔は絹糸でした。早い曲を弾くと、絹糸は切れてしまうので、曲が技巧的に発達



真剣な表情で箏の演奏に挑戦する玉南中学校の生徒たち

するにしがたがって、テトロンを使うようになりました。この箏は東大寺の開眼供養のときに雅楽が入ってきたときのものと変わっていません。これは素晴らしいことです。こちらの13弦が山田流のお箏です。山田流のお箏は胴が太くて、大きな音が出ます。

こちらは中国箏です。中国の曲で「茉莉花もぎっか」という曲があります。それを弾いてみます。こちらはどこの国のお箏だと思いますか。さきほどのDVDで「アリラン」の演奏がありました。そのときに弾いていた韓国の伽耶ガヤ琴です。箏爪ではなく指で弾きます。もともと歌の伴奏楽器なので指の肉と爪を使い分けて弾きます。これは絹糸です。生田流の古いお箏と似たところがあります。

このように古いまま残っているのが韓国の楽器のいいところですね。「アリラン」をちよつと演奏します。この奏法は、日韓伝統オーケストラの伽耶琴奏者に教えてもらいました。奏法を教えるのはとてもうれしいことです。違う文化に対して、知りたいという好奇心を持ち、教えてもらい共感する。よく音楽やスポーツに国境はないと言いますが、音楽に国境はありません。それは

お互いに育ってきたものが違う、伝統が違う、体の中にしみ込んだものが違う、他人と自分が違うように、そこに線はありません。

だけれども、相手が何を大事にしているか、どんな音色を大事にしているのか、それを学び取って、感じて、私の大事なものもあります、と伝えることが大事です。このようにお互いに交感すると、もっともっと深く相手のことを知ることができ、それは人生の中でお互いに共感し合える楽しいことです。

今日は最後まで、どうもありがとうございました。

第3部 箏の体験

会場に用意された12面の箏を使って、希望する生徒たちが、藤川いずみさんと角田ちひろさんの指導で、「さくら変奏曲」を演奏しました。

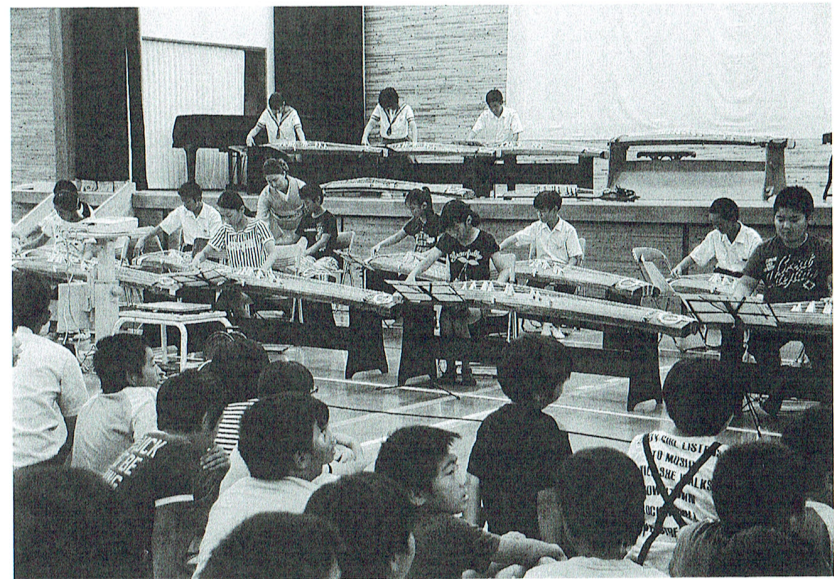
藤川いずみ（ふじかわ・いずみ）

熊本市出身。箏のソリストとして、邦楽アンサンブルをはじめオーケストラ、オペラ、歌曲、バロック、ダンス、地唄舞、座敷唄などとコラボレーションを展開、21弦箏（新事）を中心に箏の可能性を追求している。

音楽を通じた国際交流に貢献し、昨年5月にメルボルンで開催された「ジャパンフェスティバル2015」に招かれ、日本の伝統芸能を披露。日韓国交正常化50周年を記念して熊本市で開催された「日韓伝統音楽の夕べ」を、日本と韓国の伝統楽器による「日韓伝統オーケストラ」のメインの奏者として成功に導いた。スペイン舞踊と箏を組み合わせたユニット「トリニティ」を結成し、スペインミュージシャンと共演。エネルギーに満ちた新しい箏の世界を生み出した。

熊本市教委の「ホンモノにふれ感性を育む授業づくり」の講師を務めたり、文化庁の「子どものための優れた舞台芸術体験事業」で演奏したりするなど、伝統音楽の普及、発展にも力を入れている。

邦楽創造集団オーラJ所属、県立第一高校邦楽部講師。



27日には豊野小中学校の生徒たちも箏の演奏に挑戦した